

目次

緒言……………一

古曲……………一

表組……………一

菜菔……………八

梅が枝……………七

心尽し……………四

天下泰平……………三

薄雪……………三

雪の晨……………三

裏組……………三

雲上……………三

薄衣曲……………三

桐壺曲……………三

目次

中組……………六

須磨曲……………六

奥組……………六

四季の曲……………六

扇曲……………六

雲井曲……………六

雲井弄斎……………六

新曲……………六

あの部……………六

相生……………六

相生の曲……………六

葵上(山田流)……………六

葵上(生田流)……………一〇

青柳	二四	浮舟話	二六
秋の夜	二七	浮寝	二六
秋の曲	二九	宇治巡り	二八
秋の七草	二四	白の声	二八
秋風の曲	二六	歌恋慕	二八
秋の言の葉	二五	打盤	二八
梓	二七	えの部	
吾妻獅子	二四	越後獅子	二九
吾妻の花	二四	江島曲	二九
い の 部		お の 部	
石山源氏上	二四	大内山	二九
石山源氏下	二四	近江八景	二九
磯千鳥	二五	岡康砦	二九
磯の春	二五	尾上の松	二九
今小町	二五	朧月	二九
今様朝妻舟	二六	思川	二九
う の 部		女手前	二九
浮舟	二七	か の 部	

赫屋姫	二四
かさのうち	二八
かざしの雪	二九
楯枕	二九
春日詣	二九
春日野	二九
河東七草	二四
鉄輪	二四
鐘が岬	二四
鐘の音	二五
邯鄲	二六
きの 部	
喜久の盃	二五
菊の友	二七
如月	二七
喜撰	二七
貴船	二七
京名所	二八

曲水	二六
妓王	二六
け の 部	
けしの花	二六
こ の 部	
小督の曲	二五
心の奥	二六
言葉じち	二六
寿くらへ	二六
吼嚙	二六
五段砦	二六
参考文献	二五
引用歌・詩・故事・名句索引	二七
題 字	二七
田 辺 尚 雄	二七

表組(第一曲)

菜 蒨 (一名越天楽)

〔大意〕 第一唄の初句をもって曲名とした。

この曲は従来、八橋檢校作曲とされているが、筑紫流箏曲を輔正したものである。組歌の起りは山口藩主大内義隆が若い殿上人の則春・清政・春孝・重頼・高雅・行道・是正等の人々に一首ずつ唄をつくらせ、即興的に手附し箏曲にさせたものである。その為、意味の異った唄が組合されて一曲をなしている。組歌の八橋檢校当初は表組七曲、裏組六曲合計十三曲とされた。これは箏の十三絃にかたどったという。その後組歌が多くなり、菊崎檢校になって表・裏・中・奥組と区別整理された。第一曲の菜蒨は筑紫流の富貴九つの唄から七つの唄をとり上げてうたったものである。この富

第一唄

菜蒨といふも草の名、茗荷といふも草の名。

富貴自在徳ありて、冥加あらせたまへや。

貴に限り、一唄を序唄とみなした。要するに七唄を一曲とし、その第一唄を六唄の序にして七唄となっているわけである。然し明治時代からはこの菜蒨を第一唄として取扱われるようになった。一名、越天楽と呼ばれるのは雅楽の越天楽の旋律を箏曲化したからである。この曲は箏の稽古の手ほどきものとして、最初に教えられた。

〔語釈〕 〔菜蒨、茗荷〕草の名のふき、みようがを富貴、冥加に通わせたのである。

〔自在徳〕富貴にならせる自由自在の徳。〔冥加〕冥府の加護の略、

神仏の加護の意。〔めうがあらせたまへや〕僧、最澄が此叡山延暦寺建立時

の歌「あのかたら三みやくさんばだいの仏達わがたつそまにめうがあらせ

たまへや」〔無上無遍の仏様方、我建立した寺をお護り下さり〕から引用した句。

〔通釈〕 菜蒨も茗荷も草の名であるが、その名のように、上にある者に富